

2016 年度活動報告 CJP 授業：文章表現 C

早川 杏子（関西学院大学日本語教育センター）

1. クラス概要

文章表現 C では、身の回りのトピックについて、初級レベルの表現を使って文章で表現することができるようになること、お互いのコメントから、文章をよりよいものにすることができるようになることを目標とし、文章表現の活動を行った。

授業は1週間に1コマの計13回で、受講対象者は総合1および総合2の学生であった。うち9回は3つのトピックの下位テーマに沿って説明文や意見文を書き、2回は日本語の文化習慣に根付いた文章表現の実践を行った。基本的な進め方として、1回目は、下位テーマに沿って内容とアウトラインを計画して書き、教師が規定のマークで示した作文の形式や内容に関する誤用マークを見ながら、学生同士でどう修正すればよいか話し合うピア活動を通して、2回目の執筆にかかる、という流れであった。

2. 授業内容

説明文および意見文のトピックは、「食べ物」、「文化・芸術」、「日本との関わり」の3つで、それぞれに下位テーマが設けられていた。まず、「食べ物」の下位テーマとしては、①国・地域の代表的な食べ物、②スイーツの作り方、③食文化、④保存食の4つで、次に、「文化・芸術」では①建築物、②服飾、③風習の3つ、最後に、「日本との関わり」は①日本のナゾ、②日本のイメージと実際の2つであった。

選択授業であることを前提とする本授業では、第1に、書いていて楽しいと感じるタスクであること、第2に、一般的な日本語教科書においては、ほとんど出遭うことがないであろう母国や母文化の馴染み深いものの名前、または慣習等を、日本語で表現できるようになることを重視した。本授業では、既習語彙や文法を基準とせず、表現したい語彙を使って表すことを優先し、辞書等で調べた表現ではふさわしくないような場合は、アウトラインの段階で、積極的に教師が表現の選択について相談に乗った。また、読み手を意識させるために、書いたものを日本人に向けて読み上げて、シートに内容についてのコメントを書いてもらうという課題も課した。

さらに、日本語ならではの文章表現法として、川柳の句を作ったり、親しい人への手紙や年賀状を書いたりするといった活動も行った。

3. 成果と今後の課題

成果は、自分のバックグラウンドを日本語で表現できるようになることにより、話題の幅が広がることだといえよう。今後は、より明示的な形式面の指導が課題である。